

5.3. 検証結果に関する専門的見地からの評価結果 2

遠藤 薫 (学習院大学)

5.3.1. IT の利活用による地域と学校との連携への影響評価

今回の実証実験においては、IT の利活用による地域と学校との連携について、その可能性は大きく期待されるものの、まだ様々な課題が残されているというのが、全体的な評価である。

5.3.1.1. 遠隔授業による連携

まず、遠隔授業であるが、第七小学校では、社会教育会館、タウンプラザ内図書館(以下、駅前図書館) 駅前市政窓口と学校の図書館を接続して遠隔授業を行った。

その結果、生徒たちからの遠隔授業の評価はかなり高かった。また、「遠隔授業で学んだ施設に実際に行ってみたいか、という質問に対しても過半数の生徒が肯定的な回答をしている(ただし、クラス毎にばらつきが大きいことについては今後の検討課題である)。

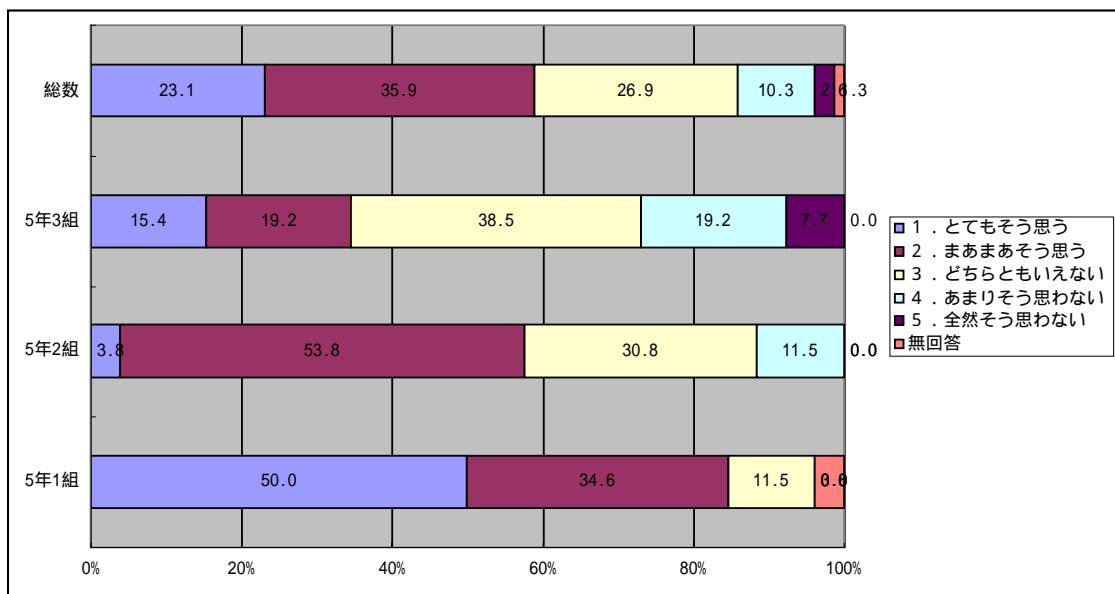


図 5.3.1 遠隔授業で学んだ施設に実際に行ってみたいですか?
(対象者: 第七小学校)

担当された先生は、「事前準備が大変だったが、それ相当のものを得ることができた」という感想を寄せておられる。たしかに、新しい試みは準備作業が非常に大変であるが、実験を積み重ねていくなかで、そうした問題は解決されていくだろう。同時に、実験のプロセスで、学校と地域の施設とが作業を行うなかで、きめ細かな地域と学校との連携関係が構築されて行くとも考えられる。

一方、第三小学校と市役所とを結んだ遠隔授業のあとでの生徒たちに対する質問の結果が、図 5.3.2 市役所への質問などは、電話と TV 電話のどちらが良いですか？
 (市役所と TV 電話で繋いだ授業 (第三小学校) 生徒 75 名) である。

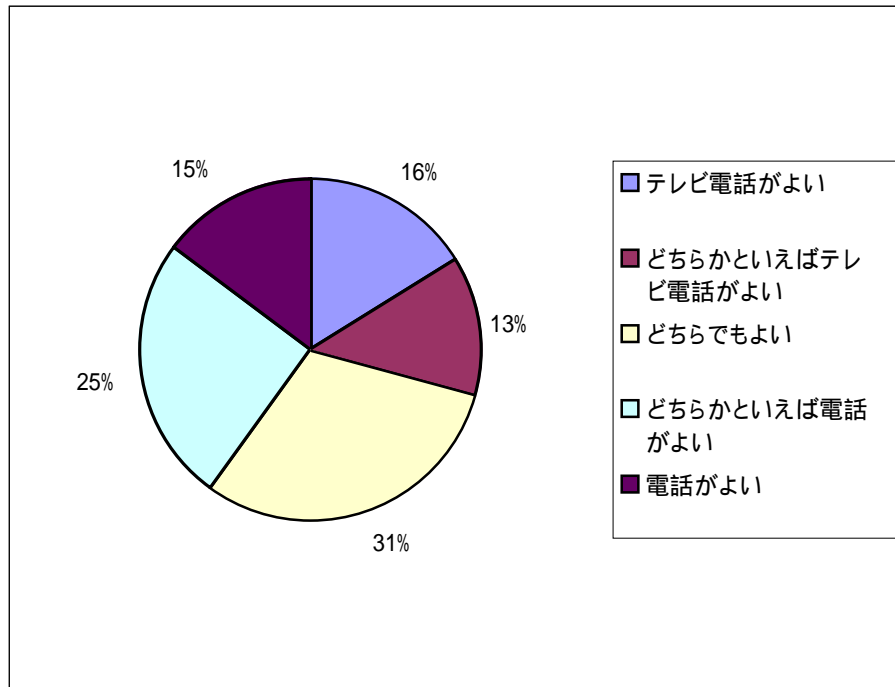


図 5.3.2 市役所への質問などは、電話と TV 電話のどちらが良いですか？
 (市役所と TV 電話で繋いだ授業 (第三小学校) 生徒 75 名)

この授業にあまり映像が必要なかったためか、どちらでもよいという回答が多かった。TV 電話がよいと回答した理由の多くは、相手の顔が見えて安心するというものであり、また、電話がよいと回答した理由の多くは、映像・音声の品質があまり良くなかったことや授業内容に映像があまり必要でなかったことがあげられていた。

担当教員および対応をした市役所職員の感想を見ても、市役所への問い合わせに TV 電話を使うことに必ずしもメリットをみだしていない。これは、映像がついていれば無条件にメリットがあるということではない (もちろんまだ慣れていない、ということもあるだろう) ことを意味している。

利用してみたいシーンとしては、市役所職員が「公害苦情の現場にいる市民から、河川の汚濁状況などの映像をリアルタイムで受ける」、担当教員が「外部の人や外国と接続して交流学习」を挙げられているが、これらは映像があることやリアルタイム双方向コミュニケーションがまさに活かされるシーンである。今後の活用においては、これらメリットを十分に活かす方向で考えられるべきである。そのときには、遠隔授業は地域と学校を連携させる上できわめて意義あるものとなるだろう。

5.3.1.2. デジタルビデオ送信による授業中継による連携

次に、授業中継（第三小学校）の結果では、学校の様子を保護者や地域の人に見てもらうことが有効だと答えた人が半数を超えた。

またその理由として、「遠い会場に行かなくても臨場感を味わえる」という、ITによる物理的制約の解除を挙げた人がもっとも多かった。

とはいうものの、一方で、子供たちの表情がよく見えない、子供たちと交流を図りたいなどの要望も多かった。

映像の取り方や提示の仕方が、まだマスメディア的（一方向コミュニケーション）な方法論から脱皮できていない可能性が考えられる。リアルタイム双方向コミュニケーションというITの利点を活かしたコンテンツ制作がのぞまれる。

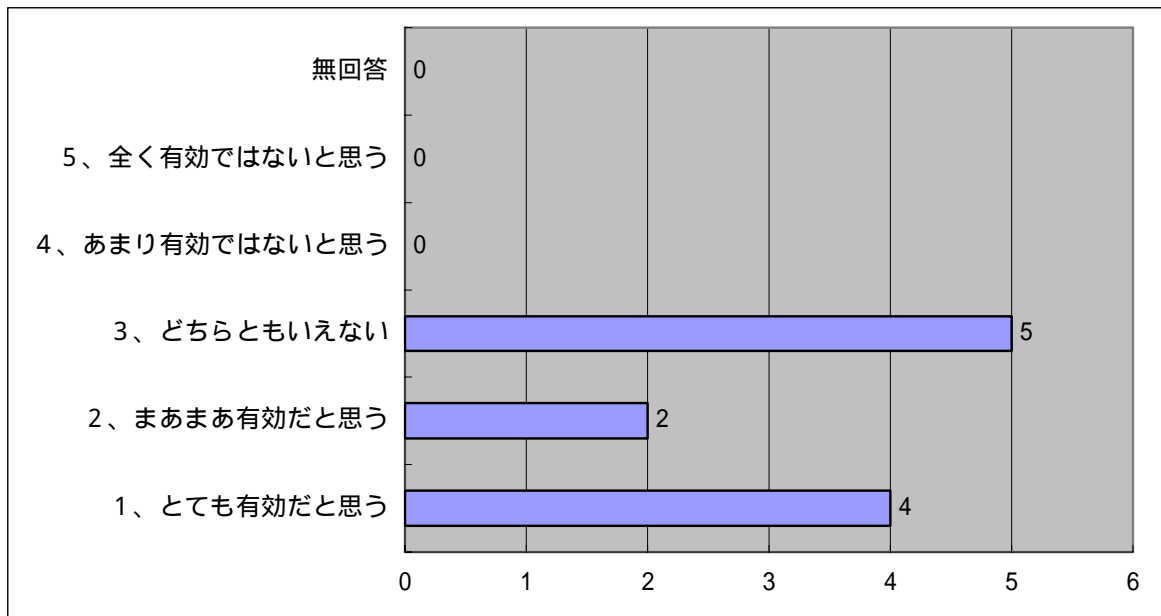


図 5.3.3 このように学校の様子を保護者や地域の人に見てもらうことは学校教育に有効だと思いますか？（第三小学校教員 11 人）

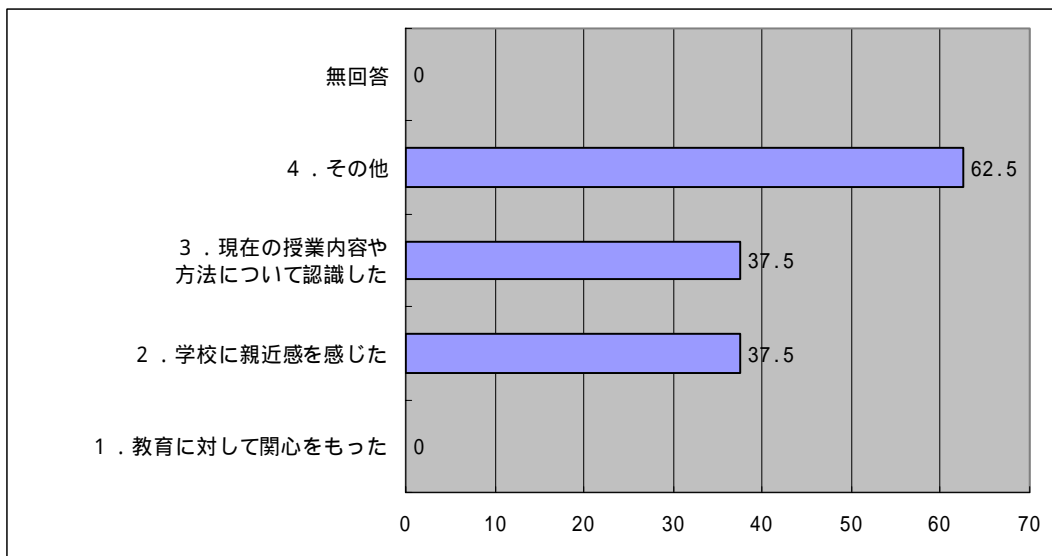


図 5.3.4 小学校の公開授業の中継を見てどう思いましたか？ (DVTS 閲覧者 8 人)

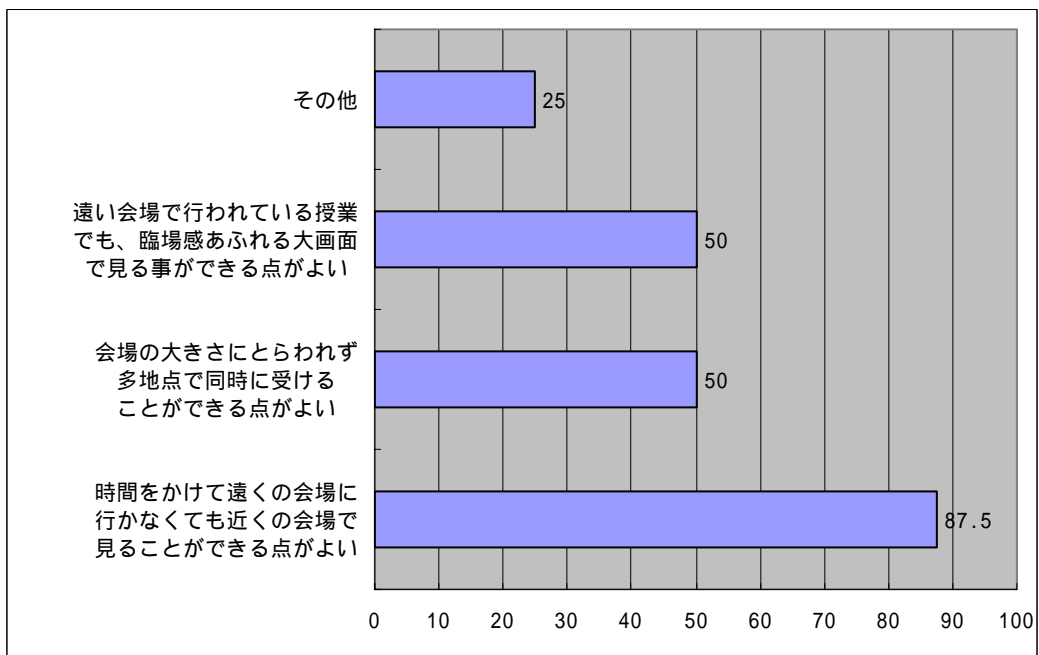


図 5.3.5 公開講座や授業の中継についてどう思いますか？ (DVTS 閲覧者 8 人)

第三に立春式中継（第四中学校）について、デジタルビデオ映像配信システム（以下、DVTS）閲覧者に聞いた結果が、図 5.3.6 学校の中継を見てどうでしたか？（DVTS 閲覧者 21 人）である。

これらによれば、立春式の中継を見ることにより、一般市民が教育に関心をもつきっかけとなったことがわかる。

また、距離という物理的制約を離れての体験は、とくに市内でも必ずしも頻繁に行き来するわけではない地域間の相互交流を図るという意味で大いに重要であろう。

ただし、今回の実験では、双方向コミュニケーションに必ずしも重点が置かれていなかったため、会場同士の交流や、会場と閲覧者との間の意見交換をのぞむ声が多かった。

先にも述べたが、IT の重要な特質はリアルタイム双方向コミュニケーションが可能な点にある。そのゆえに、地域間の連携に IT が活用できるという期待も生じているのである。今後のシステム改善の方向として重要なキーとなると考えられる。

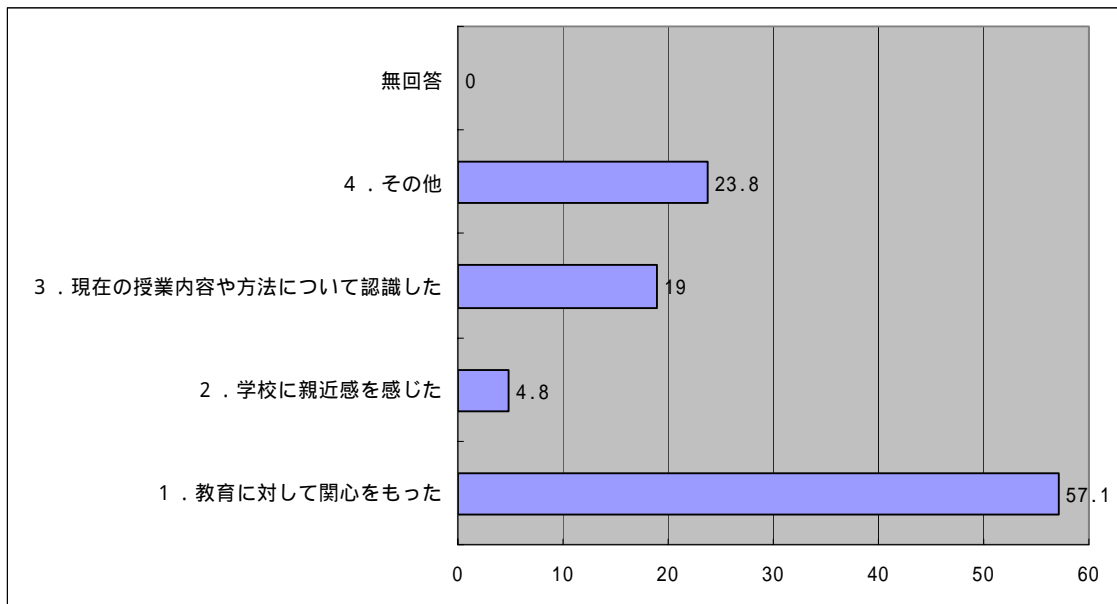


図 5.3.6 学校の中継を見てどうでしたか？ (DVTS 閲覧者 21 人)

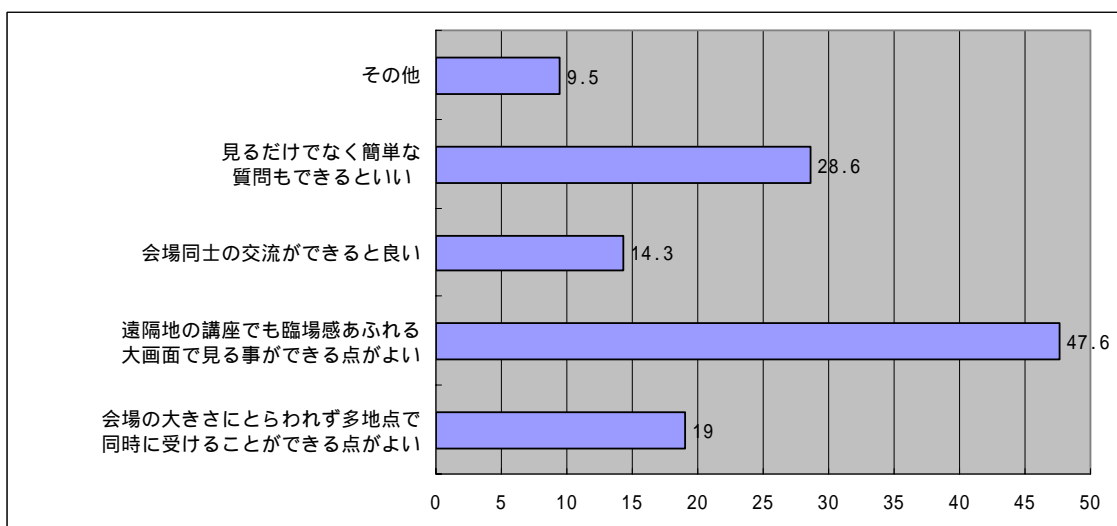


図 5.3.7 学校の中継についてどう思いますか？ (DVTS 閲覧者 21 人)

5.3.1.3. IT教育を通じた地域間連携の可能性

最後に、e!school 実験を終えての感想を市施設職員に尋ねた結果が図 5.3.8 e!school 実験の結果のメリット（市施設職員 21 人）である。これによれば、もっとも多くの人同意しているのが、学校と施設の連携強化と、施設間の連携強化のきっかけとなったことである。

これは、IT 教育を通じた地域間連携の可能性が、潜在的ながらきわめて大きいことを伺わせるものである。

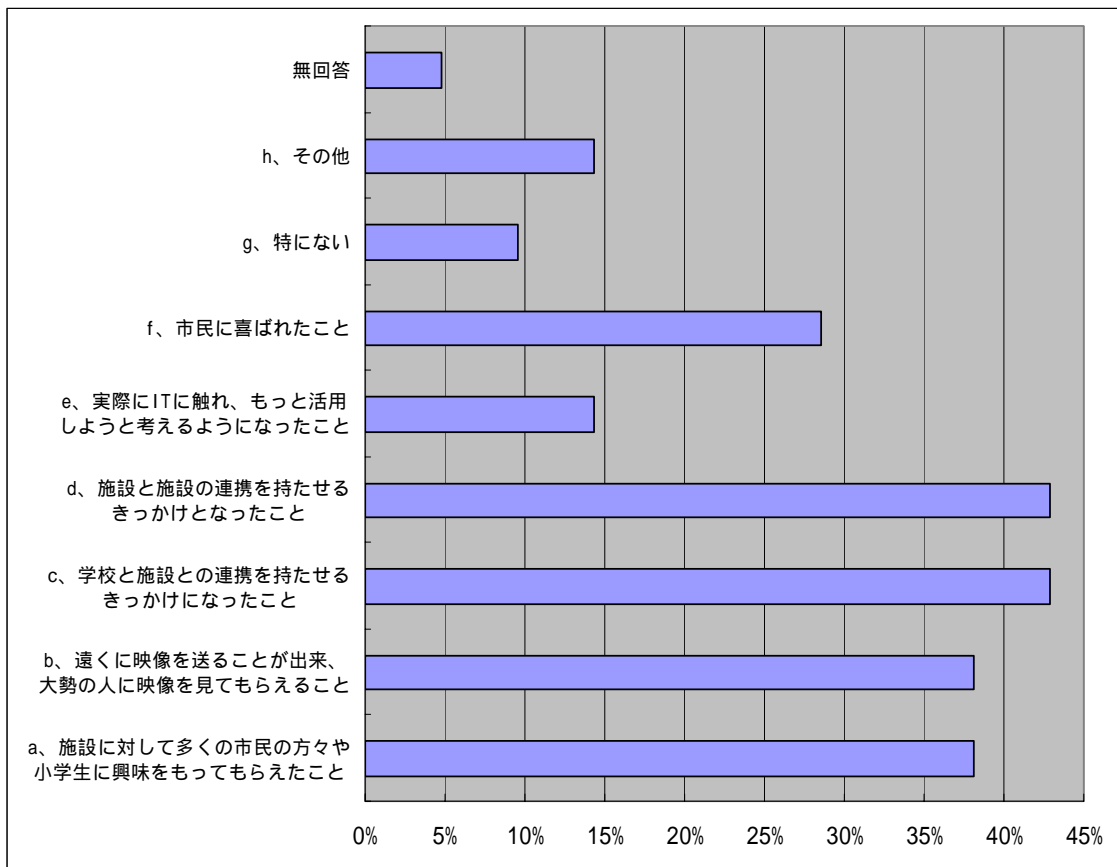


図 5.3.8 e!school 実験の結果のメリット（市施設職員 21 人）

5.3.2. IT の利活用による地域間の連携への影響評価

今回の実験では、必ずしも地域間の連携という側面に力点が置かれていなかった。そのため、評価も困難であるが、TV 電話のコミュニケーション上のメリットとして、図 5.3.9 IPv6 TV 電話コミュニケーションの良い点はどのようなところだと感じましたか(複数回答可)(IPv6 実証実験に関する e モニタへの質問)に示すように、顔を見ながら話すことによる親密度の向上が挙げられている。

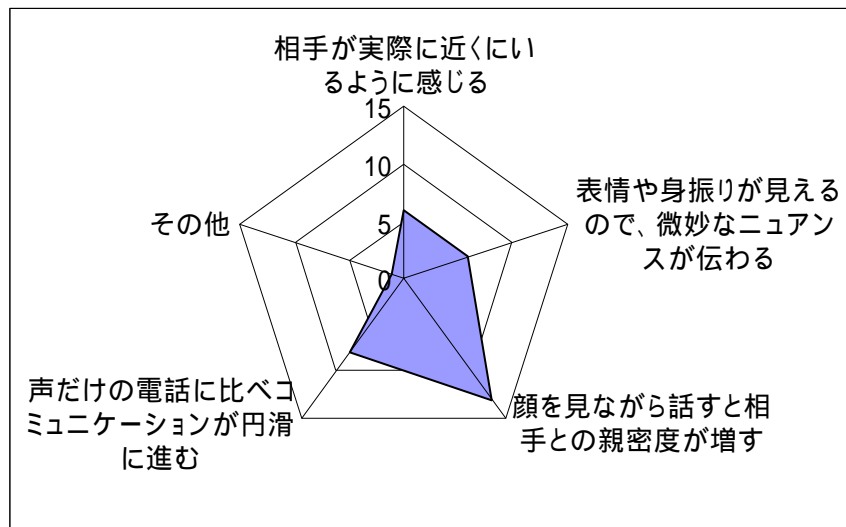


図 5.3.9 IPv6 TV 電話コミュニケーションの良い点はどのようなところだと感じましたか(複数回答可)(IPv6 実証実験に関する e モニタへの質問)

その一方、デメリットとしては、図 5.3.10 IPv6 TV 電話コミュニケーションの改善点はどのようなところだと感じましたか(複数回答可)(IPv6 実証実験に関する e モニタへの質問)に示すように、「画面が見えるためにかえって身構えてしまう」「見せたくない部分まで見られてしまう」という点が上げられている。

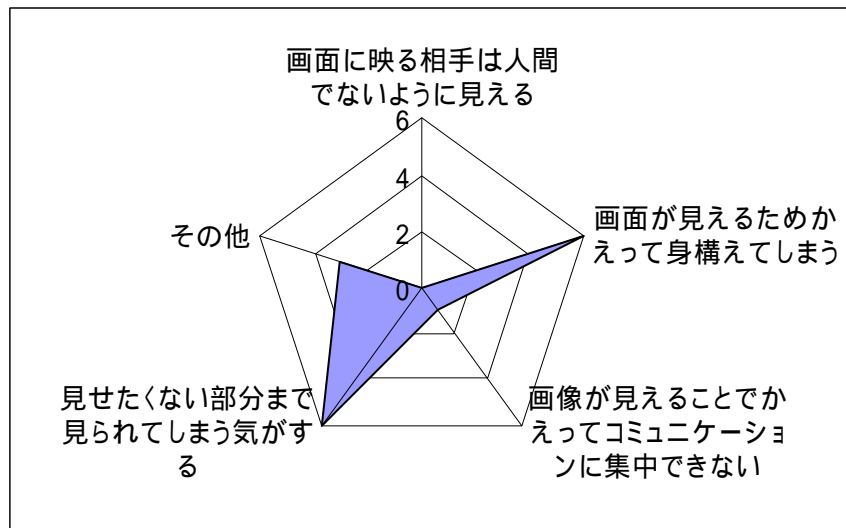


図 5.3.10 IPv6 TV 電話コミュニケーションの改善点はどのようなところだと感じましたか (複数回答可)(IPv6 実証実験に関する e モニタへの質問)

その結果、図 5.3.11 今後 IPv6 電話が一般社会に普及していくとすると、どのようなシーンでもっと利用されたいとお考えですか？ (IPv6 の実証実験に関する e モニタへの質問) に示すように、今後 TV 電話を使って行いたいコミュニケーション・シーンとしては、もともと親密度の高い家族・友人か、あるいは、身構えたコミュニケーションが前提となるビジネス・コミュニケーションかという二極分化を示している。「地域」や「モニタ同士」というその中間のコミュニケーションでは、あまり利用意向は高くないという結果となっている。

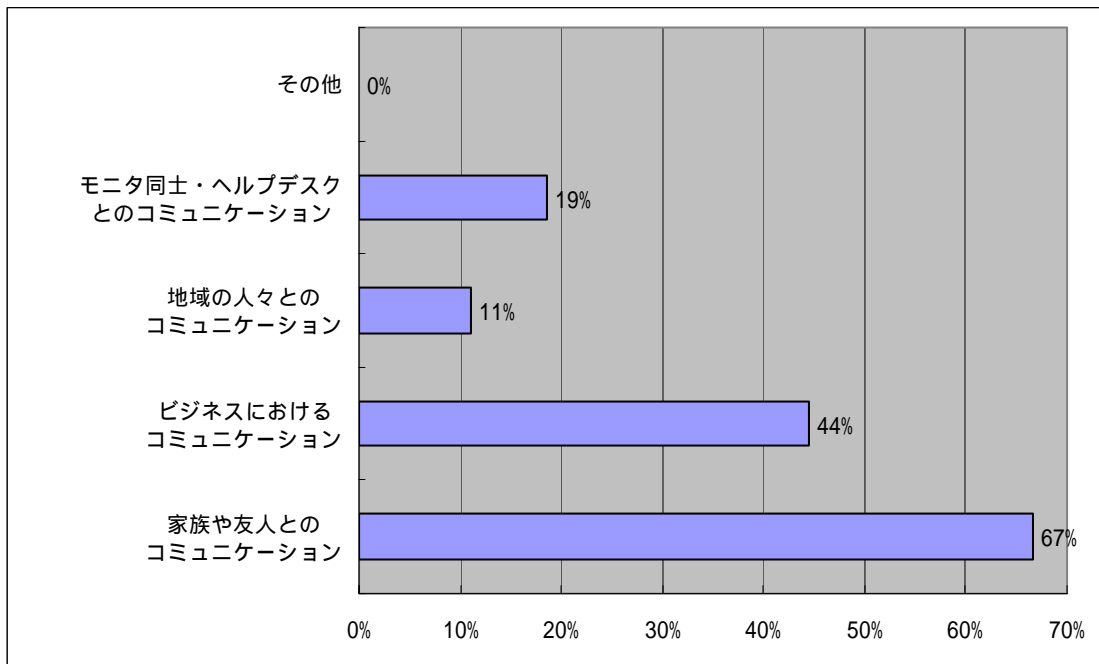


図 5.3.11 今後 IPv6 電話が一般社会に普及していくとすると、どのようなシーンでもっと利用されるとお考えですか？（IPv6 の実証実験に関する e モニタへの質問）

しかしながら、先にも述べたように、映像を利用したコミュニケーションには様々な可能性が考えられ、地域間の連携を取るためのコミュニケーションにももっと活用されてしかるべきである。今後、重点的に改善の方向を探るべきであろう。

5.3.3. IT の教育への利活用に向けた制度的課題の抽出と新たな学習モデルの検討

以上見てきたように、今後、IT を教育やそれを通じた地域との連携に利活用していくためには、以下の問題点を改善した学習モデルを構築すべきである。

(1) 基本的な IT リテラシーの不足

IT を活用し、地域と連携した教育を実践する上でまず障害となるのがリテラシーの不足である。それは、教員、地域職員、生徒、市民のいずれのグループに関してもあてはまる。それぞれの立場にふさわしいリテラシーの訓練をまずはかるべきである。

(2) コンテンツの不足

上記と関連して、提供されるコンテンツがまだまだ豊富とはいえない。その結果、IT を活用した教育も、物珍しさだけで終わりかねない。地域のさまざまな立場の人びとによって、多様なコンテンツが提供され、蓄積されることが重要である。

(3) ビジョンの不足

しかしながら、IT の教育への利活用には、全体ビジョンがないと行き当たりばったりの教育、コンテンツ作成にとどまり、IT への関心が漂流するばかりという結果にも陥りかねない。無論、ビジョン策定に時間ばかり取られて実験や実施がいつになっても始まらないという事態も避けなければならない。全体ビジョンと個別実験とを車の両輪のように組み合わせつつ、今後のプロジェクトを進めていくべきであろう。

(4) 広報の不足

さらに、メディアというものには、多くの人が利用することによって指数関数的にそのメリットが高まるという特長がある。この点を考えるならば、一般の人が気軽に IT を利用するリテラシー教育の重要性とともに、このような試みを実施していることをあらゆる機会を捉えて市民にアピールすることの重要性はいくら言っても言い足りないほどであると考えられる。

以上の改善点をふまえて、今後はさらに様々な立場の人びとの視点を取り入れた学習モデルの構築が必要である。

最後に、Learning Together を使った結果に関する第三小学校生徒の回答を図 5.3.12 Learning Together を使った結果（第三小学校 生徒 202 名）に示す。これによれば、利用の結果として、「地域への関心が高まった」という回答がもっとも多い。必ずしも明示的には現れていないが、IT の教育への利活用が、地域への関心、ひいては地域間連携に大きな可能性を秘めていることを示唆しているといえよう。

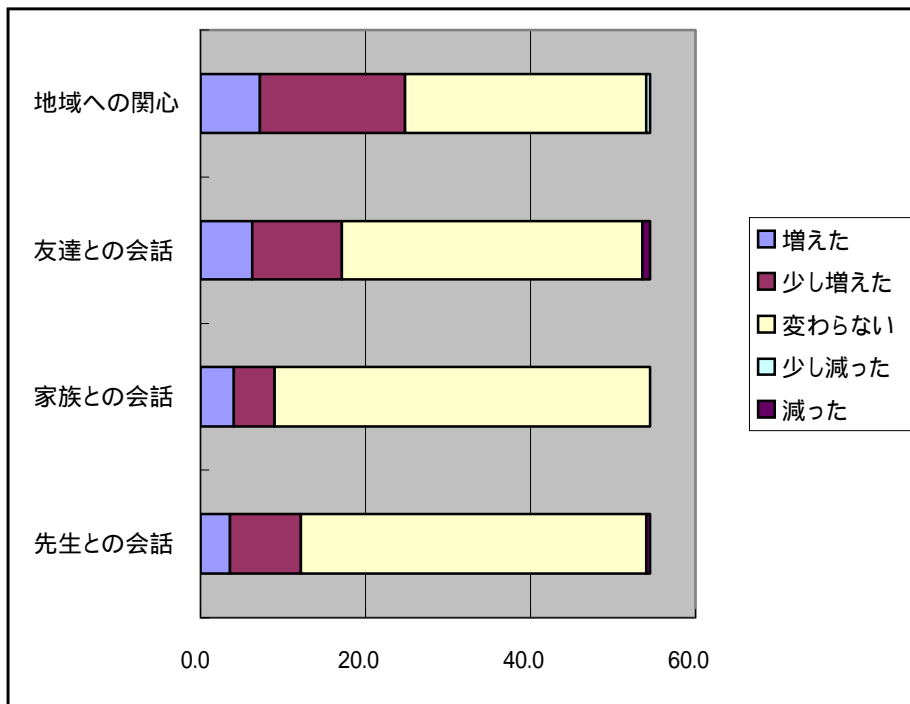


図 5.3.12 Learning Together を使った結果 (第三小学校 生徒 202 名)